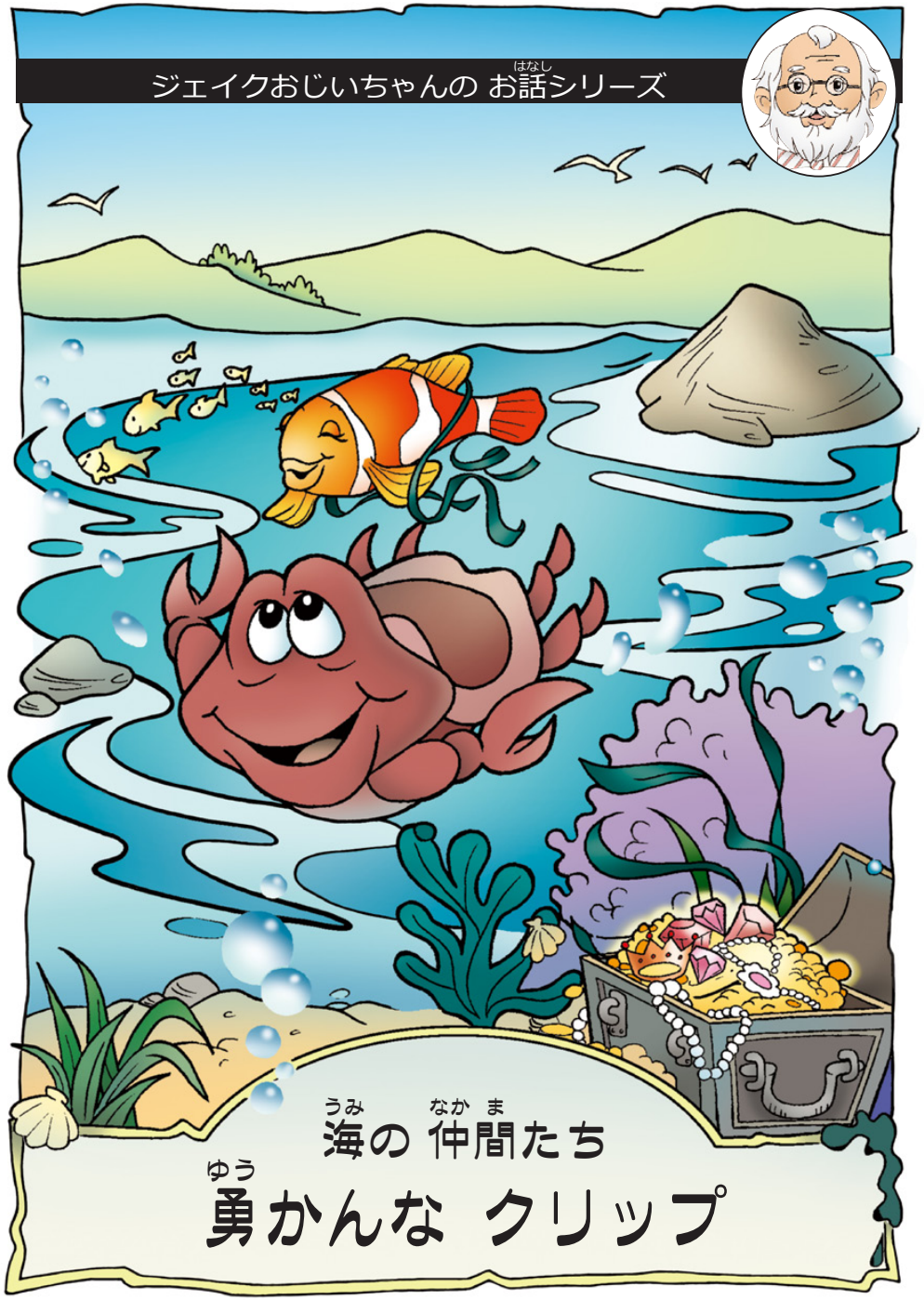
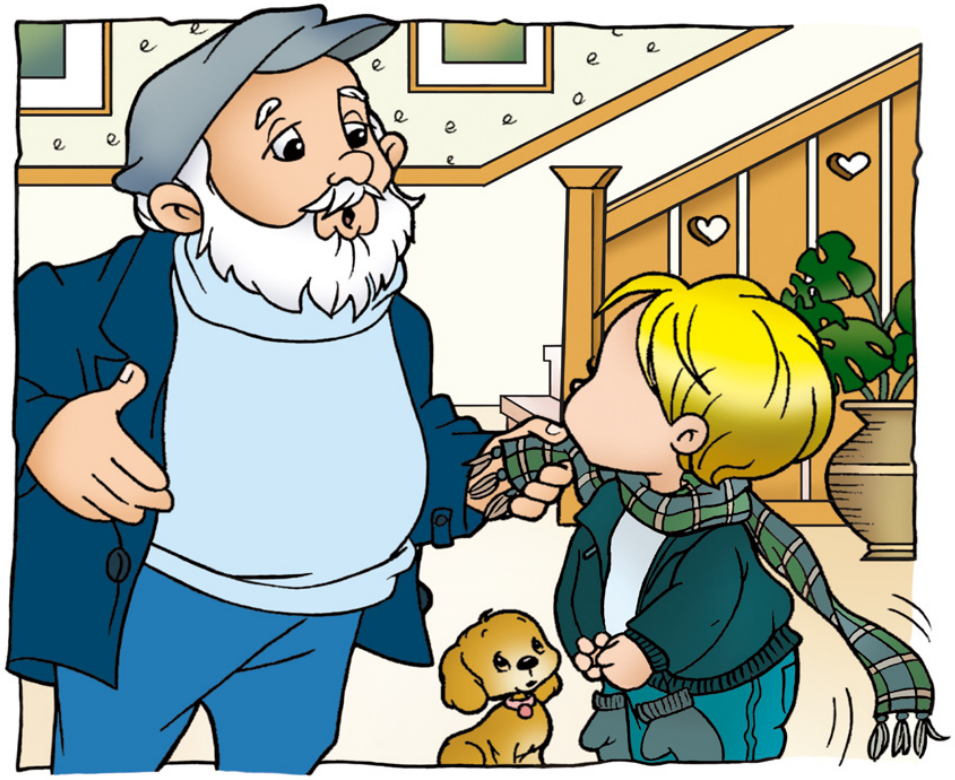


「したくは できたかい、トリスタン？」 コートを 着て ぼうしを かぶりながら、ジェイクおじいちゃんが 言いました。

「今 行く！」 そう 返事すると、トリスタンが 階段を かけ下りて きました。

「おくれないように 行かんとな。さあ、マフラーを して ジャケットを 着るのを 手伝って あげよう。」

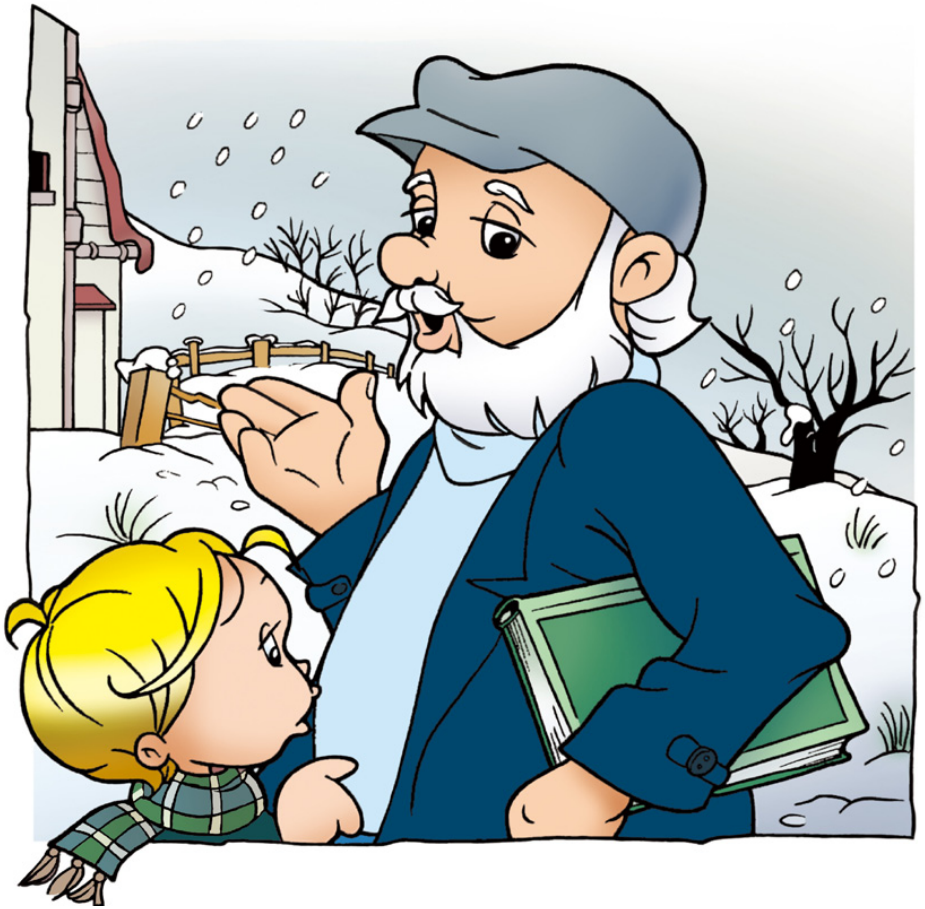
「ありがとう、おじいちゃん。」



1 週間に 1 度、ジェイクおじいちゃんは トリスタンを 連れて、近所の 図書館に 行きます。子どもたちの 読書クラブで、お話を 読んで あげるのです。

おじいちゃんは、そこで 子どもたちに お話を 読んで あげるのが 好きです。図書館に 行く 道々、おじいちゃんは 楽しそうに 口笛を ふいています。わきには、特別な お話の 本を かかえています。

「今日は、何の お話を 読むの？」と、トリスタン。



「ふふ、それは ひみつだよ。」 おじいちゃんは 笑って 答えました。

「ジェイクおじいちゃんが 来た！」 図書館の 中に いた トロイが、大声で 言いました。

おじいちゃんが 入って 来ると、子どもたちは 思い思いの 場所に すわって、静かに していました。

「やあ！ ずいぶん 静かじゃ ないか。すてきな おどろきだね。」と、おじいちゃん。

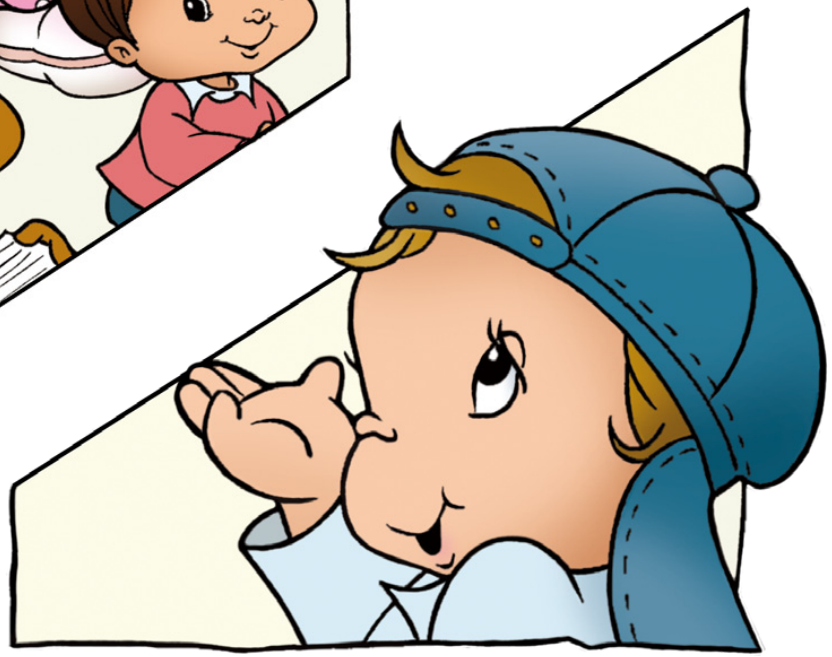
子どもたちは クスクス 笑いました。

「ジェイクおじいちゃん、こんにちは！」　みんなが声を 合わせて 言いました。

「こんにちは、みんな。」ジェイクおじいちゃんは そう言って、ぼうしと コートを かけました。

「今日の お話は、クリップという 名前の やさしい カニの お話だ。じゃあ、始めようか。」と、おじいちゃん。

★ ★ ★

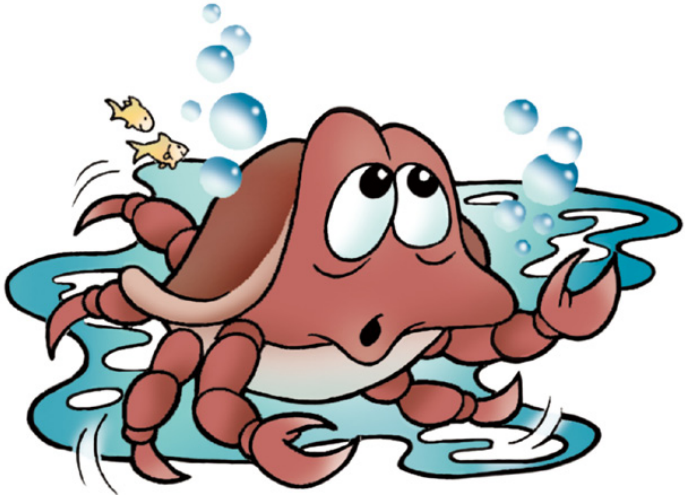


「待ってよー。」　カニの クリップは、大声で 友だちを よびました。

（ぼく、みんなより おそ過ぎて、全然 追いつけないや。）と クリップは 思いました。

すると、人魚の カミールが 泳いで もどって 来ました。「ごめんね。手伝って あげるわ。」　そう 言って、カミールは クリップの 片方の はさみを にぎって、みんなに 追いつけるよう、引っ張って あげました。

「ありがとう。」　そう 言いましたが、クリップは ちょっと 悲しく なりました。



（友だちが ぼくを 引っ張って くれないと みんなに 追いつけないなんて。きっと、足手まといだろうなあ。友だちなのに、何の 役にも 立って ないもの。）

今日は、クマノミ・パレードの 日です。毎年、クマノミ学校は シャッダ王国の そばで パレードを します。カミールたちは、オレンジ・アイ・リーフへ 向かって いました。そこは、パレードを 見るのに 最高の 場所なのです。

パレードの 先頭では、クマノミが はなれわざを ひろうして いました。その 次は、クマノミ楽団です。その 後に、ダンサーたちが 続きます。最後は、クマノミ新体操。海草の リボンを 水中で ぐるぐる 回して もようを えがいて います。

「まあ、きれい！　わたしも パレードに 参加できたらなあ。」　カミールが 楽しそうに さけびました。

「わしは、楽団に 加わりたい ものだ。」と、フグの バダーじいさん。

「ぼくたち、はなれわざが できるよ。」と、ヒトデの リトルトン。

タツノオトシゴの シャロが リトルトンを かたごしに ひょいと 投げ上げると、リトルトンは 1回転して、シャロの 尾に 着地しました。

「ぼくも、海草リボンで もようを えがくのを 学べるよ。」　ハゼの ゴビーは 海草を ふり回しながら 言いました。

「わたしたちも、パレードを しましょうよ。家族のために パフォーマンスするの。」と、カミールが 言いました。

「じゃあ、練習しに 行こう！」リトルトンは わくわくしながら 言いました。

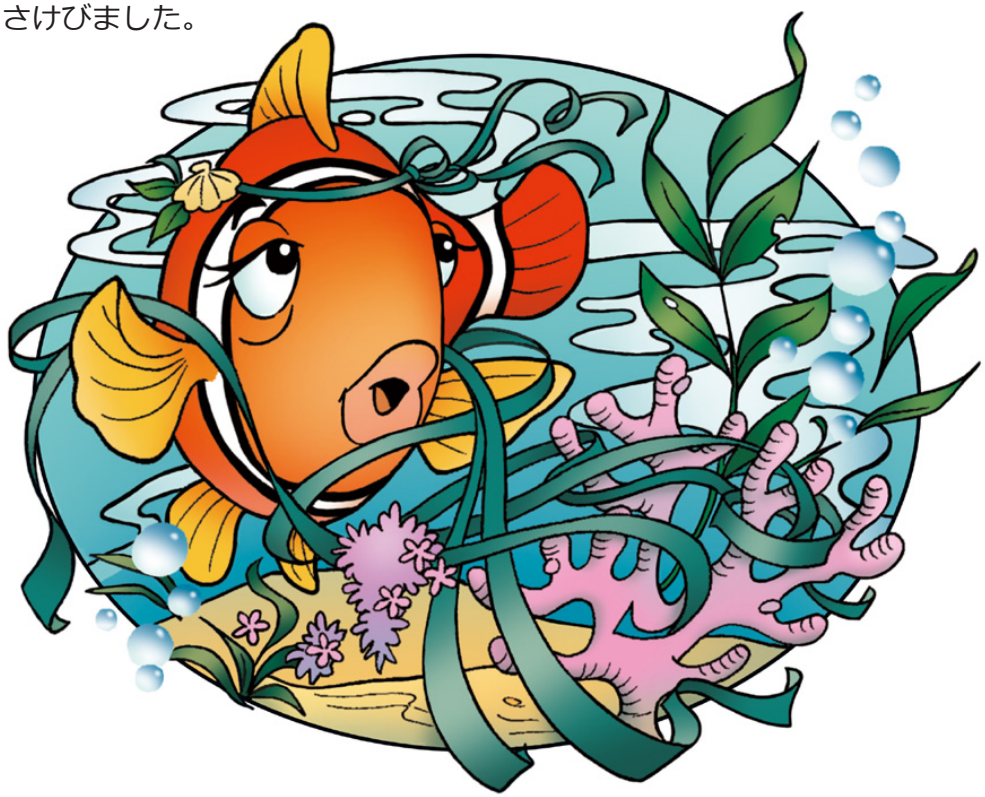
みんな、パレードの 演技を 練習する ために 泳いで 行きましたが、クリップは サンゴに すわって、パレードが 通り過ぎるのを ながめて いました。

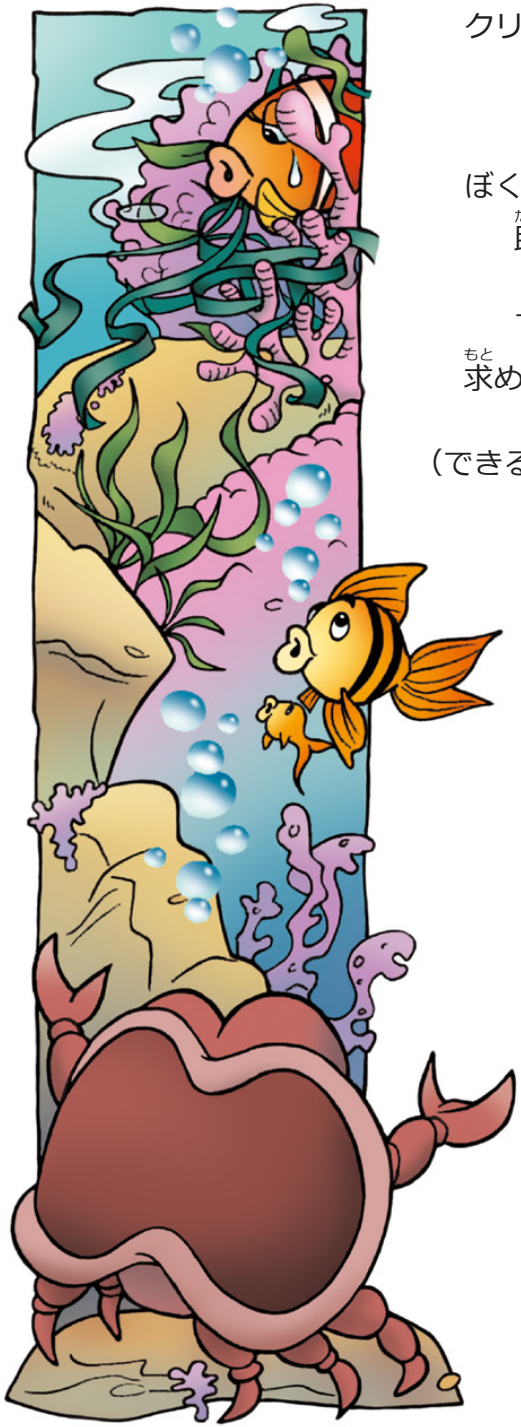
（ぼくには、パレードで できる ことが 何も ないや。）　そう 思うと、クリップは 悲しく なりました。

その時です。１匹の 小さな クマノミが、パレードの みんなから ずっと おくれて いました。ひれには 海草リボンを にぎって いましたが、自分の 海草リボンで ぐるぐる巻きに なり、リボンが 目に かかって、進行方向も 見えません。

すると、ぐるぐる巻きに なっていた クマノミが サンゴに ぶつかって、リボンが サンゴに 引っかかって しまいました。それを 外そうと して 一生けん命 引っ張りましたが、外れません。

「助けて！　動けないわ。お願い、だれか 助けて！」と、クマノミは さけびました。





クリップは、こまっている クマノミを 助けたいと 思いましたが、ふと 思いました。（きっと、ぼくには 無理だろうなあ。だったら、助けようと しても むだだよね。）

すると、小さな クマノミの 助けを 求める 声が また 聞こえて きました。

（できる ことが ないか、見て 来よう。）と クリップは 思いました。

クマノミは、クリップが 近付いて 来るのに 気が 付いて 言いました。
「助けて くれない？」

「やって みるね。だけど、大した ことは できないかも。助けを よんで 来る ほうが いいかな。」と クリップ。

「お願い。助けて ちょうだい。」そう 言うと、クマノミは 泣き始めました。

「泣かないでよ。何とか やって みるから。ぼく、あまり 強く ないんだ。」

「君の 名前は？」と、クリップが たずねました。

「ティンセル。」と、クマノミが 答えました。

「ティンセル、この サンゴを 引っ張って みるね。それで、君が ぬけ出られたら いいんだけど。」

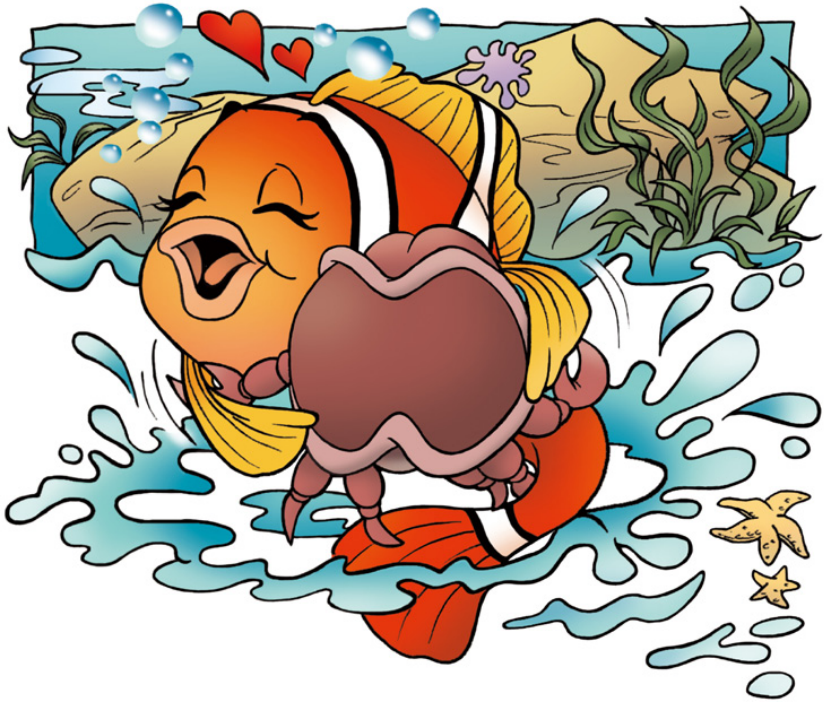
「分かったわ。かけ声 かけてね。」と ティンセル。

クリップは サンゴの 周りに 両方の ハサミを かけました。「こんな 感じで いいと 思う。じゃあ、行くからね。１、２の３、引っ張って！」

クリップも ティンセルも、同時に 引っ張りました。何度か やって、とうとう 引っかかっていた サンゴが 外れました。

「外れたわ！　ありがとう！」　ティンセルは 大喜びです。

「こっちの リボンも ほどいて あげるね。」　クリップが 海草リボンを おさえている 間に、ティンセルが 体を くねらせて ぬけ出ました。



ついに 完全に 自由に なると、ティンセルは クリップに ハグを しました。「あなたは わたしの 英雄だわ！　助けて くれたんだもの！　名前は？」

クリップは はずかしそうに 下を 向き、どもりながら 言いました。「ぼ・・・ぼく・・・、クリップ。助けて あげられて、よかったよ。」

「あなたは こんな 外れで、何を していたの？」

「ぼく、友だちと、パレードを 見ていたんだ。みんなは 泳いで 行っちゃったけど、ぼくは おそくてね。」　クリップが わけを 話しました。

「あなたが おそくて、本当に よかったわ。その おかげで、わたしを 助けられたんだもの。本当に ありがとう。」と、ティンセル。

「どう いたしまして。」

「わたし、もう 家に 帰らないと。本当に 助かったわ。ありがとう、クリップ！　じゃあね。」

クリップは 友だちを さがしに 泳ぎ始めましたが、心は 幸せでした。自分は 小さくて、友だちと 同じ ことが 何でも できる わけじゃ ないけど、それでも だれかの 助けには なれると 分かったからです。

★ ★ ★

「クリップみたいに、自分は 小さくて、大した ことは できないって 感じる ことは、あるかい？」　ジェイクおじいちゃんは みんなに たずねました。

「ある。」　みんなが いっせいに 答えました。

「時々、お兄ちゃんみたいに なれたらなあって 思う。だって お兄ちゃんは、いろんな ことの やり方を 知っているんだもの。だけど ぼくは 小さくて、大した ことが できないって 思うんだ。」と、デリックが 言いました。

「何かを 学ぶには、時間が かかる ものだ。だけど、お母さんや お父さんを 手伝う 方法は、いろいろ あるじゃ ないか。どんな 方法が あるかな？」

「ぼくは、お母さんの 庭仕事を 手伝ってる。」と、トリスタン。

「ぼくは、お父さんと いっしょに 洗車したり するよ。」と、デリック。

「お母さんは、わたしに お料理の お手伝いを させて くれるわ。」と、シャンタル。

「ぼくは、部屋の 片づけを 手伝えるよ。」と、トロイ。

「君たちが 小さくても、何か 得意な ことが なくても、関係ないんだ。だれでも お手伝いは できるんだよ。」と、ジェイクおじいちゃんが 言いました。

ジェイクおじいちゃんと トリスタンが 帰りかけると、みんな、「さようなら。」と 言いました。

「ジェイクおじいちゃんは、最高の おじいちゃんだよ。いつも ぼくたちが 学べる お話を してくれて、ありがとう。」と、トリスタンが 言いました。

「それは、どう いたしまして、トリスタン。お前も、すてきな 孫だよ。」　おじいちゃんも、ほほえんで 言いました。

文：カチューシャ・ジュスティ　絵：アグネス・リメア　彩色：ダグ・カルダー　デザイン：ロイ・エバンス
掲載：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2007年、オーロラ・プロダクションズAG、スイス、不許複製　“Grandpa Jake’s Storybook: Ocean Treasures: Courageous Clip”--Japanese